

# 【テーマ】 「学修成果の可視化」

## 【主催】事務システム分科会

## 活動報告

日 時：2025年10月9日（木）14:00 -17:15  
場 所：芝浦工業大学 豊洲キャンパス + オンライン配信（Webex）（ハイブリッド開催）  
出席者：79名

### 1. 研究内容

今年度第二回目の事務システム分科会が、芝浦工業大学豊洲キャンパス（東京都江東区）の会場とオンラインのハイブリッド形式で開催されました。

今回は、芝浦工業大学様よりシステム構築の視点も含めた先進的な取り組み事例をご紹介いただきながら、グループワークを行い、それぞれの大学の課題と課題解決を考える分科会となりました。さらに、最新AV機器やハイブリッド対応設備を備えた教室、図書館等も見学させていただきました。

### 2. スケジュール

- 14:00 ○開会挨拶  
○ご講演・グループワーク  
**「カリキュラムの整合性と学修成果の可視化～その要点とシステム構築～」**  
**芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター長 榊原 暢久 先生**  
**芝浦工業大学 情報イノベーション部 部長 鈴木 洋 様**
- 16:20 ○休憩（10分）  
16:30 ○キャンパスツアー（40分）
- 17:10 ○閉会挨拶  
17:15 ○終了

## 「学修成果の可視化」

2025年10月9日（木）、事務システム分科会が、芝浦工業大学豊洲キャンパス（東京都江東区）の会場とオンラインのハイブリッド形式で開催されました。

教育の内部質保証がますます重要視される昨今、「学修成果をどう可視化すべきか」「ディプロマ・ポリシー（以下、DP）達成度の根拠付けは」「システムはどのように構築するのか」等の課題を抱えている大学も多いのではないのでしょうか。

今回は、芝浦工業大学様よりシステム構築の視点も含めた先進的な取り組み事例をご紹介いただきながら、グループワークを行い、それぞれの大学の課題と課題解決を考える分科会となりました。さらに、最新AV機器やハイブリッド対応設備を備えた教室、図書館等も見学させていただきました。

冒頭、成蹊大学の吉田氏から「第4期認証評価における評価基準に、学修成果の適切な把握、評価が追加され、学修成果の可視化はますます重要になっています。今日のご講演とグループワークを織り交ぜて、課題解決を考えていきたいと思います」と挨拶があり、講演に移りました。

### ■ご講演：

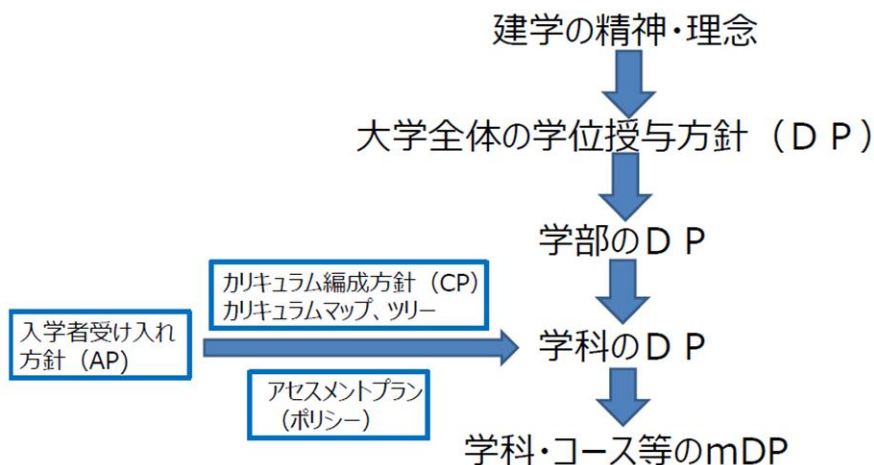
「カリキュラムの整合性と学修成果の可視化～その要点とシステム構築～」  
芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター長 榊原 暢久 氏より

### ○教育の質保証に向けて、mDP達成度の可視化のためのSITポートフォリオを構築

2008年の中教審の答申で、「何を教えたか」ではなく「何を学んだか」を重視するよう提言されました。以降の答申でも、全学的教学マネジメントや、学修成果の可視化が重要視されています。本年度から始まる大学基準協会の第4期認証評価では、内部質保証の要求水準が大きく上がりました。ここでいう内部質保証とは、「PDCAサイクル等を適切に機能させることによって、質の向上を図り、教育、学習等が適切な水準にあることを大学自らの責任で説明し証明していく学内の恒常的・継続的プロセス」のことを言います。

芝浦工業大学（SIT）では、「社会に学び、社会に貢献する技術者の育成」という建学の精神のもと、教育の理念を時代に合わせて「世界に学び、世界に貢献するグローバル理工系人材の育成」と定めています。全学DPには知識・技能だけでなく、汎用的能力（多様性認識・倫理観・コミュニケーション・チームで仕事をする力等）も含まれます。学部や学科のDPは全学DPに紐づけられており、学科のDPを達成すれば、結果として全学DPを達成するよう設計されています。このように、DPを全学・学部・学科の多層で設定する場合、各層の項目間の対応関係を明確化することが「整合性」とをとるということです。

## 異なるレベルでのDPの整合性は必要



通常、DPは抽象度が高く、達成度の確認が難しいという課題があります。そこで本学では、学科DPをさらに詳細化したmDP（Middle Level DP）を全学科・コースで設定しました。これによりmDPと科目との関係がより明瞭になり、学修成果の可視化が容易になりました。なお、mDPの代替として、カリキュラム・ルーブリックを設定したり、JABEE基準（A～I）に準拠したレベル設定をしたりしている機関もあります。

＜グループワーク：自己紹介の後、所属組織におけるDPと各授業の関連性を共有＞

本学の学修成果の可視化システム「SITポートフォリオ」をご紹介します。mDPと科目を関連付けたカリキュラムデータベースを構築し、学生が履修登録した全科目について振り返りを入力させています。入力しないと次学期の履修登録ができない仕組みになっているため、回答率は100%です。学生は「SITポートフォリオ」を通じて、自身の成績、履修状況、そしてmDP達成度を確認でき、教職員は学生の学修状況を多角的に把握できます。例えば、ある学科・学年の学生の特定のmDPの平均取得単位数が少ない状況が確認できれば、学習指導計画の改善を促す等、継続的な教育改善に役立っています。

＜グループワーク：「各所属機関でDPの達成度をどう判断しているか」をテーマに議論＞

学修成果の可視化は、一般に5つのタイプに大別されます。本学では「シラバスと連動した累積型・分解型の成果測定」を採用しています。ただし大学院課程では必修科目が少なく、論文提出が必須のため、論文審査時のルーブリックで評価しています。どのタイプが優れているということではなく、大学の方針・状況に応じてタイプを選択して取り組むと良いでしょう。

## ■ご講演：

### 「カリキュラムの整合性と学修成果の可視化～芝浦工大の事例～」 芝浦工業大学 教育イノベーション部 部長 SDコーディネーター 鈴木 洋氏より

## ○大学の機動性を高めるICT基盤整備を、内製開発とデータ一元化により実現

私は2023年4月から情報イノベーション部に所属し、教育のDX化に関わっています。同部の開発チームでは、教務システム等、多くのシステムを内製開発しており、短期間で機能追加が可能な体制を整えています。外部のサービスやパッケージを使用することもあります。必ずデータ連携を念頭に置いてシステム設計を行い、様々なデータを学内DBに集約しています。また運用チームでは、ネットワーク、教卓システム等の運用のほか、ライセンス管理や事務職員の利用支援を行い、教員・職員・学生にとって利用しやすいICTシステムの提供に努めています。最近では、数百万通のメールに耐えられる大規模メールサーバーを再構築したり、図書館システムのOA（オープンアクセス）化に向けて図書館システムを更新したりしました。同部の中でも教育イノベーション課は、教学マネジメント、IR（Institutional Research）、FD・SD、学生支援、DE&I等を担当する部署で、本学の教育改革の中心と言えるでしょう。

本学のDX基盤は、多くのサブシステムの集合体で、内製開発しているものがほとんどです。そのため、コロナ禍の遠隔授業移行等、急な要件に対し、機動力が高く対応できました。一方で他部署から、「何でも対応してくれる」と過剰な期待を受けてコスト増になることもあり、標準化と内製のバランスが課題です。

データの一元化が概ね実現できており、IR活動においては非常に強力な武器となります。インフラとしては、最近はGoogle Workspace、Microsoft365等のクラウドサービスを多用。ネットワークは、キャンパス間回線障害に備え、白井データセンターへの年末移設を検討中です。

教室のAV設備は、ほぼ全教室で仕様を統一し、他キャンパスでも同一オペレーションで利用できます。設計は内製で、要件作成も学内で実施しました。コロナ禍には、約10日間で教卓からオンライン配信ができるよう改造し、クリアな音声で遠隔授業を実施できるシステムを構築しました。ただし、特注構成のため、コストの課題はあります。現在は、PlusDX事業で、ほぼ全教室に安価な黒板撮影用カメラを設置し、オンライン授業でも板書が見えるよう改善しています。同時に、CO2濃度等を計測する全教室環境モニターも設置しました。

先ほどの榊原先生の話にもあった通り、本学では「SITポートフォリオ」を構築しています。ポートフォリオとは「個々の学生の学びについて電子的に記録、蓄積されたものすべて」と定義し、グラフ等で視覚的に確認できるダッシュボードを提供。デジタル学修歴証明書発行システムも構築し、デジタルバッジ発行の自動化も実現しています。



# SIT-ポートフォリオ・ダッシュボード

- ・ポートフォリオとは、個々の学生の学びについて電子的に記録、蓄積されたものすべて(と定義した)
- ・ダッシュボードは、ポートフォリオから学生の状況を視覚的に確認できるようにしたもの
- ・学生本人だけでなく、教職員、保護者も同じものを参照可能
- ・内製なので、随時改善したり項目を増やしたりしている  
→学修成果の可視化へ
- ・ディプロマサプリメントとしても
- ・AP事業の成果
- ・学修目標
- ・授業自己評価
- ・取得単位
- ・GPA
- ・学科順位
- ・TOEIC
- ・学修成果の可視化
- ・副コース単位取得状況
- ・CEFR
- ・PROG
- ・正課外活動状況
- ・学費&奨学金状況
- ・etc...



<グループワーク:「学修成果の可視化」をテーマに、自大学の状況共有やアイデア出し>

ここからは、教職協働と職員の能力開発についてお話します。本学の理工学教育共同利用拠点は、2016年に初認定され、以降約2,200名が利用しています。例えばFD・SDプログラムは全教職員の参加を推奨しています。学外の方も参加可能な研修では、様々な視点・新たな気づきが得られると好評です。

最初は、業務の一環等の外発的動機で研修に参加していたとしても、参加や学びに意義を感じるようになると、内発的動機づけへとつながっていきます。これが、主体的に行動する職員の育成へとつながります。また外部研修への参加も有効でしょう。この際、管理職の理解が不可欠です。本学では、管理職を先に外部フォーラムへ参加させ、「学内外の研修へ参加するのは当然」という空気感を醸成するよう努めています。

前例踏襲主義から脱却するために、様々な取り組みを行ってきました。最近では、小さなPDCAサイクルを回してアジャイル開発を行ったり、Teamsで様々なチャットグループを作ったりと、部署をまたがって仕事をすることが日常的になってきました。ただ人事評価や手当等に課題は残っています。

大学は静的組織ではなく、社会変化に応じて持続的に変革が必要です。職員こそが改革を牽引できるというメッセージを学内で発信し続けて、研修等を通じて同じキーワードを共有する仲間づくりを増やしていければと思います。

## ■キャンパスツアー：

現地参加の方のみ、キャンパスツアーを行いました。図書館、産学官連携室、イノベーションスタジオ、ランゲージカフェ、実験室、PC室、オープンラボ、ラウンジ、教卓システム等を見学させていただきました。企業の要望で個室を増やしたこと、価格が下がり大型ディスプレイが導入しやすくなったこと、部屋の予約のシステムと連携した電子ペーパーを活用していること等をご説明いただき、参加者の方は興味深く聞き入っていました。

## ■まとめ：

分科会の結びに、清泉女子大学の可児氏より挨拶がありました。「見学させていただいた施設は、大変立派でした。私は、10年程前にも見せていただいたことがあるのですが、かなり変わっていて驚きました。学修成果の可視化に関しては、主体的に動く職員を動かすための研修も参考になりました」と述べ閉会となりました。

#### 4. 参加校 [25校44名] ・参加企業[8社35名] ・参加総数[79名]

亜細亜大学 [1]	文京学院大学 [2]	アシアル株式会社 [2]
鎌倉女子大学 [1]	愛知学院大学 [1]	クラウドエース株式会社 [3]
共立女子大学 [4]	東海大学 [2]	クラスメソッド株式会社 [1]
福井県立大学 [4]	関西国際大学 [2]	東通産業株式会社 [2]
芝浦工業大学 [4]	女子栄養大学 [1]	東京コンピュータサービス株式会社 [1]
上智大学 [7]	専修大学 [1]	有限会社ハーティサービス [1]
神田外語大学 [1]	大阪経済大学 [2]	インターン生 [1]
成蹊大学 [1]	中部大学 [1]	富士通Japan株式会社 [24]
清泉女子大学 [1]	帝京平成大学 [1]	
千葉工業大学 [1]	東京理科大学 [1]	
大東文化大学 [1]	日本工業大学 [1]	
東京都市大学 [1]	立教大学 [1]	
東洋大学 [1]		

#### 5. 所感（事務システム分科会運営委員会）

今回のCS研では、大学教育の内部質保証やDX基盤の整備、学修成果の可視化・評価、それらを支える職員育成や教職共同のあり方まで、幅広く深い内容を共有できた。

参加者の関心は高く、講演・グループワークとも活発な質疑と意見交換がなされ、運営者として有意義な場を提供できたと感じている。

#### 【 分 科 会 の 様 子 】



#### 【事務局より】

次頁以降に開催後アンケート結果（抜粋版）を記載しています。

開催後のアンケート結果詳細版や当日プレゼン資料ご覧になりたい方は、「[CS研・IS研情報交換サイト](#)」に掲載しておりますのでそちらをご覧ください。  
また、今回の分科会開催に際し事前アンケートを行っています。事前アンケート結果につきましても「[CS研・IS研情報交換サイト](#)」に掲載しております。

#### ◆「CS研・IS研情報交換サイト」について

CS研・IS研の会員向けに情報・資料をご提供し、会員の皆様が情報交換をする会員専用のサイトです。  
（サイトのご利用をご希望の方は、利用アカウント申し込みサイトにてお申込みください。）

情報交換サイトURL：

<https://csis.ufinity.jp/shared>

※利用アカウント申し込みサイトURL：<https://seminar.jp.fujitsu.com/public/seminar/view/102857>

#### 【連絡先】

私立大学キャンパスシステム研究会 事務局

〒 212-0014 神奈川県川崎市幸区大宮町1-5 JR川崎タワー

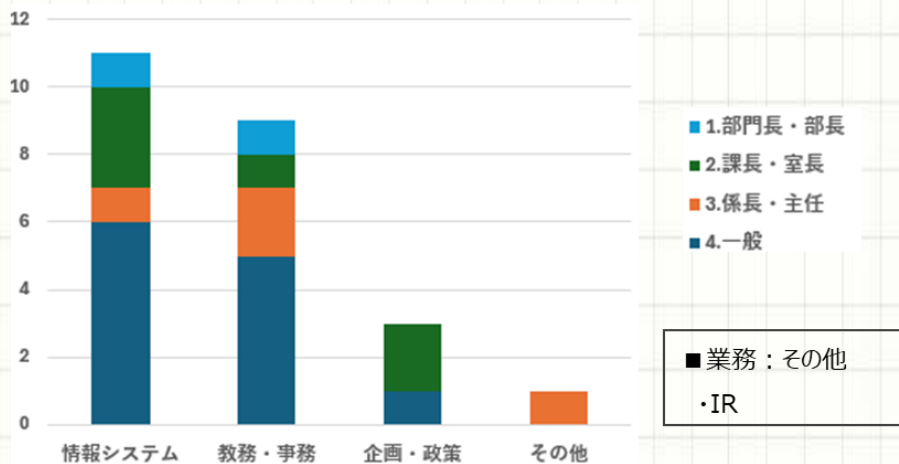
富士通Japan株式会社 ビジネス変革室内

E-mail：[contact-csiken@cs.jp.fujitsu.com](mailto:contact-csiken@cs.jp.fujitsu.com)

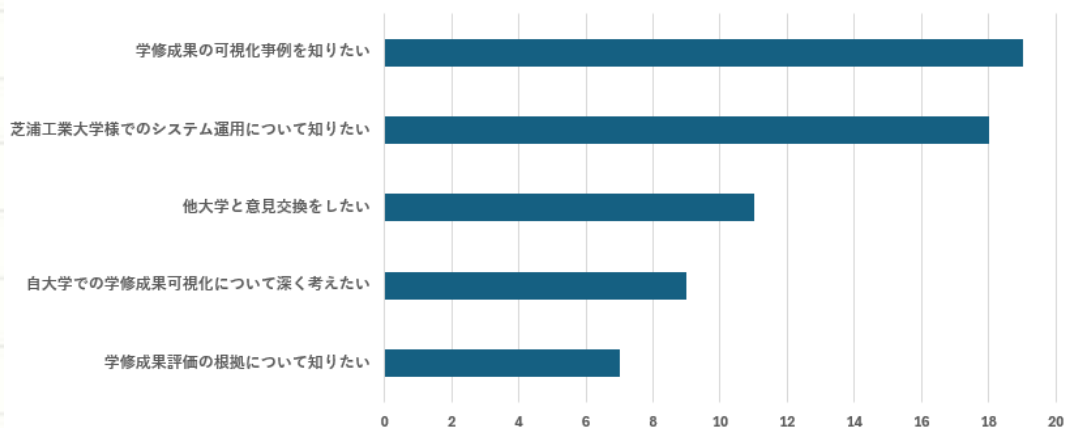
# 開催後アンケート結果【回答数／対象者数：25／43（大学関係者のみ）】

## ■ 担当業務と役職について

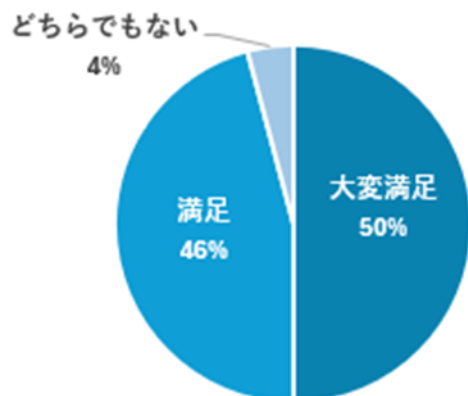
### ■ 担当業務と役職



## ■ 参加した目的について



## ■ 本日の分科会の全体満足度について



満足以上 : 96%  
やや不満以下 : 0%



## ■全体満足度の評価理由について（一部省略・抜粋）

### 1. 有益な情報・知識の獲得（講演・事例）（件数：13）

- 学修成果の可視化について基本的な所から、芝浦工業大学の事例まで話を聞くことができ大変参考になりました。
- 自大学内で共通の言語化をすることが大切ということが分かりました。
- 可視化情報を活用する事例がとても参考になりました。
- 自大学で構築しているシステムの背景を深く知ることができた
- 榊原先生・鈴木様のご講演がとても興味深かったです。
- 学修成果の可視化の考え方や他大学の事例を知れたため
- 芝浦工大の具体的な事例が聞けたから。
- 認証評価の背景、可視化について学べた。芝浦工業大学の事例もあり、分かりやすかった
- 運用に関しての内容やシステムに関しても聞けたので、満足である。
- 直近で弊学で改善対象となっている案件について、芝浦工大さんの具体的な事例を参照することができたため
- 芝浦工業大学さんの講義を受けたようで満足しています
- 鈴木様のお話は、私も情報システム部門に所属していることもあり、大変興味深く拝聴しました。
- 学修成果の可視化について、芝浦工業大学様での貴重な取り組み事例をご紹介いただき、大変参考になったため
- 学修成果の可視化における他大学の教職員の取り組み事例を知ることができて良かった。

### 2. 参加者間の交流とネットワーキング（グループワーク・意見交換）（件数：5）

- 進行上、時間的な制約もあり、難しいかもしれませんが、グループ内の数名だけでなく、他の大学さんがどのように運用されているのかもって聞きたかったです。
- グループワークにて他大学の方々と交流できたこと
- 他大学との意見交換で、情報が共有できた。
- 合間にワークを挟む形式についても、フリーテーマで意見交換するよりも具体的な議論がし易く、短時間でとても効果的だと感じました。
- グループワークを通して他大学さんの学修成果の可視化に向けた取り組みをお聞きすることができて大変参考になりました。

### 3. リアルな場の体験（施設見学）（件数：3）

- 大学内の見学ができたため。
- 芝浦工業大学の教室設備などを実際に見学できて、本学での応用に知見を得られました。
- 芝浦工業大学様のキャンパス施設の見学については、本学で実現可能かどうかは別として、大変刺激になる事例が多数あった。

## ■今後、CS研で実施してほしいイベントやテーマについて（一部省略・抜粋）

- 大学合併や大学連携法人でまとめて複数の大学でCampus Xsを連携運用している事例がありましたら、みなさん今後の参考になるかと思います。また、専門学校や系列高校でも共用しているケースはありますか。高大共用も今後の流れかと思います。富士通さんが、この先、文教分野を縮小していく計画がなければ、前述のことが他社さんより強みになるかと思います。
- 今回の学修成果の可視化のように教学マネジメントに関わる研修会には参加させていただければと思っております。
- デジタル学生証、アカウント管理

## ■CS研についてのご意見・ご要望について（一部省略・抜粋）

### 【開催計画（日程・場所・形式）に関する要望】

- 遠方の地方の大学からこれている方が、金曜日開催だったら懇親会に参加できていたと言われていたので、金曜日の開催を検討して欲しい。
- 最近、川崎での開催が多くなり、夕留のころに比べて、千葉からの参加が難しくなっていました。富士通グループさんの東京オフィスがありましたら、そちらで開催いただくと参加がし易くなるかもしれません。
- 遠方から参加しているので、終了時間をもう少し早く（せめて16時半頃まで）していただけるとありがたい。
- ハイブリッド開催の要望があることも理解できるが、オンライン参加者を意識するあまり、運営の難しさや対面参加者への影響が生じている。興味・関心の高い方々が現地に足を運んでくださっており、また、他大学との関係性構築や対面での意見交換もCS研の大きな意義と考え、あくまで対面参加者の満足度向上を第一としてもよいのではと感じる。（もちろん、単純な講演形式の回などであれば、オンライン活用は大きなメリットがあると思います。）
- オンラインハイブリッド開催は大変ありがたく存じます。

### 【プログラム内容（当日のアクティビティ）に関する要望】

- キャンパスツアーもう少しみたかったです。
- 今回の懇親会はシニアで実施したこともあり、分科会終了から懇親会までの導線がスムーズで、学内で懇親できるという新鮮さもあった。通常のお店だと席の移動も難しいので、次回以降も会場内での立食形式での懇親会開催を検討すると参加率も上がり、もっといろんな方とお話できて良いかもしれません。
- グループワークは不要かと思います。
- オンラインは、富士通さんがファシリテーターして欲しいと感じた。
- キャンパス見学ツアーも勉強になりました。